

東日本大震災歯科支援シンポジウム

歯科として地域にどう貢献できるか ～震災2年を迎えてこれからの課題～

2013年3月20日 14:00～17:00

東京医科歯科大学 歯科棟南4階 演習室

シンポジスト

一瀬浩隆氏（気仙沼・南三陸「食べる」取り組み研究会）

中久木康一氏（女川歯科保健チーム）

北村良平氏（Smile with you）

モデレーター

中久木康一氏

記録とまとめ

木部雅也

シンポジウム開催趣旨

災害時の歯科による支援と一言と言っても、公的・半公的に業務として派遣された人たちと、ただ気持ちだけを届けに全てを自腹で準備して行った人たちがいます。

後者には、日当も保障も何もありませんが、義務も期限もありません。いまだ続けている人たちもいますが、時期が変われば求められることも変わり、そして自分自身の日常の生活も変わり、できる支援も変わって来ています。

3年目を迎えるにあたり、一度「東日本大震災の被災に対する外部支援」という目線で2年という期間を振り返ってまとめることによって、これからどうしていくのがよいのかを考えたいと思い、シンポジウムを開催することとしました。

まず、「歯科治療や口腔ケアを、自治体の持つべきサービスの担い手として展開する」という形ではない活動を行っている個人・団体に、それぞれの活動の変遷や、現在の関わり、そして、今後の展望についてご発表いただき、その後、「今後はどうすべきなのか、何ができるのか」について、来場された多くの方々のご意見をいただきながら、話し合いたいと思います。

特に、これからの時期の支援は、直接的な支援ではなく、間接的な支援でなければならないのではないかと思います。もはや、被災による機能不全を補うために外部から導入する「緊急支援」という時期はとうに過ぎ、地元の資源を活用したサポートという時期になっています。地元主体での地道な活動というのは、必ずしも評価を受けるものではありません。しかし、結果的に、評価された人や団体がいても、それは地元がその人や団体を受け入れて活かす力があつたからであるというのは、現場で見ていると感じます。

では、これからの時期は、どうあるべきなのか。外部からの支援をうまく生かしてもらえるように、それぞれの地域における今後の「町づくり」にどのように貢献できるのか。参加者のみなさんの意見をいただきながら考えてみたいと思います。

中久木康一

シンポジウム概要

東日本大震災から2年が経過し、これまでの被災地支援を振り返るとともに、今後の支援のあり方について、もう一度どうあるべきかを考えるために、中久木康一氏の呼びかけに一瀬浩隆氏、北村良平氏が賛同し、シンポジウムを開催いたしました。

シンポジスト3氏とも歯科医師であるため、「歯科として地域にどう貢献できるか」という題目になっていますが、歯科の範囲だけでなく、一人の人間として、被災地・被災された方々に、今後どのように貢献することができるかを考えるシンポジウムにしたいという思いのもと、開催いたしました。

歯科関係者をはじめ、約30の方が参加してくださいました。

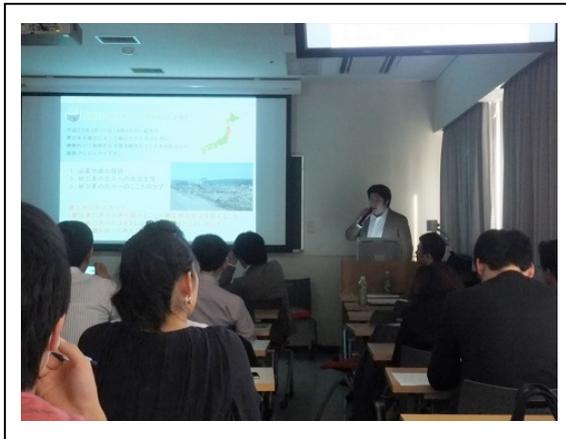
- 1) 歯科医療ボランティアから地域に就職、中からできることを
一瀬浩隆氏（気仙沼・南三陸「食べる」取組み研究会）



- 2) 歯科救護所支援から町民への関わりへ
～町が楽しく盛り上がるサポートを～
中久木康一氏（女川歯科保健チーム）



3) 避難所訪問からコミュニティ支援へ、そして、学びの場へ
北村良平氏 (Smile with you)



4) ディスカッション

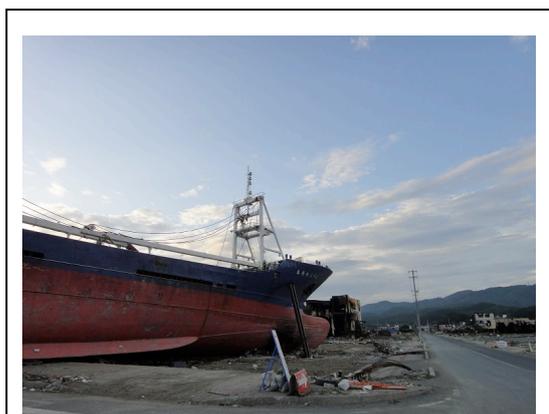


シンポジウム内容

1) 歯科医療ボランティアから地域に就職、中からできることを 一瀬浩隆氏（気仙沼・南三陸「食べる」取組み研究会）

一瀬氏は震災後、何か自分にできることはないだろうか、という思いから、2011年5月13日～21日にPCAT（日本プライマリ・ケア連合学会 東日本大震災支援プロジェクト）に参加されました。

この支援で氏は、避難所に歯科ニーズは乏しく、在宅に歯科ニーズが存在しているということを感じ、次にJRS（気仙沼巡回療養支援隊）に参加され活動を行われました。



気仙沼の打ち上げられた巨大漁船

津波の被害を受けた歯科医院



これらの活動を通して、氏は在宅診療の必要性を感じ、また在宅には摂食・嚥下のニーズが非常に多いことを痛感され、摂食・嚥下や口腔ケアをより高いレベルで習得されるために、東名厚木病院にて研修を受けられ、現在も引き続き当病院に勤務されています。氏は東名厚木病院には歯科がないため、口腔ケア・食事ケアに従事されています。

一瀬氏は気仙沼のためにも何かしたい、という気持ちから気仙沼の山谷歯科医院にも勤務されており、毎週420kmを通勤されているという驚きの事実も明かされました。

そして氏が本シンポジウムで最も強調されたのが、多職種連携の必要性でした。

在宅の全身疾患もありリスクも高い患者さんの嚥下障害などにも、歯科医師だけでなく、医師・看護師・ヘルパー・作業療法士・理学療法士・ケアマネージャー、介護用品業者など多職種による連携をとることの必要性和、その効果を強調されました。



病院での口腔ケア

多くの医療機関が被災した気仙沼では、残った医療機関に患者が集中。キャパを超えた病院で、口腔ケア支援は必要とされていました。

在宅での口腔ケア

もともと在宅リソースの乏しい気仙沼では、潜在的に在宅口腔ケアニーズがあった。



現在も気仙沼にて、氏は多職種連携を行いながら摂食・嚥下のニーズに全力で尽力されています。継続的な地域支援を行うため、住民票も気仙沼に移され、地域の外からではなく、中から地域に貢献されておられます。



施設での摂食訓練

「口から食べたい」の願いを叶えるために施設の職員と協力して定期的に摂食訓練を行っています。

一瀬氏は最後に、今後の被災地への貢献として、地域の中からの支援ではなく、寄り添った「応援」をしていくことが必要ではないか、という言葉で締めくくられました。

2) 歯科救護所支援から町民への関わりへ

～町が楽しく盛り上がるサポートを～

中久木康一氏（女川歯科保健チーム）

中久木氏は震災直後から現在もなお、女川歯科保健チームとして歯科支援に関わっておられます。震災直後から、現在までの女川町を中久木氏は見続け、寄り添い続けてこられました。



震災後の女川町保健センター

震災後の女川湾



女川町で行われた歯科保健医療支援活動として

- ・巡回歯科保健医療支援活動
- ・仮設歯科診療所の設置
- ・歯科口腔保健支援事業（震災復興基金事業）

について説明されました。

その中で、最も強調されていたことが、「支援活動のあるべき姿とは？」ということでした。

支援活動とは決して押し付ける事ではなく、ヒトに対する単発ボランティアでもなく、地域主体で行われるべきものであり、支援する側の何がしたい、ではなく、支援する地域に対して何が必要かを考えなくてはならないことを訴えていました。

支援ニーズは刻一刻とかわり、現場で感じるものであり、支援する側の論理に当てはめるべきものではないという事を、氏は強調されていました。



仮設住宅での歯科口腔保健支援事業

保健師・歯科医師・歯科衛生士で、各仮設住宅をまわって、ゲームなどで楽しみながらの歯科保健教育を行いました。気になることがある人がいたら、その場で地元歯科医師に診察してもらいました。

女川町イベント

「心もからだもぽっかぽか」歯科ブース

個別の歯科相談を受けるとともに、支援でいただいた口腔衛生用品の配布・説明、「入れ歯の作り方」の展示、技工体験などを通じて、皆さんに歯科について知っていただきました。



歯科医師が支援活動に行ったけれど、歯科の仕事ができる環境になかった。

このような話は歯科に限らず、震災後によく聞かれた話です。

氏はこのような支援への観念そのものが、根本的に支援活動として成り立っておらず、そもそも支援とは地域自体が盛り上がり、力を取り戻すためのサポートであるということ、ユーモアをまじえながら話されていました。

支援とは、支援そのものが表に出て目立つべきものではなく、いわば内助の功のような存在であるべきではないか。

まずは人間としての支援があり、その先にたまたま必要性があれば、「歯科」としての支援がある。

これらの言葉が中久木氏の主張をよく表しているように思います。

講演の終盤での「いまだに帰らない家族を待ち続けている人がいる」

この言葉の意味を考えるだけでも、本来の支援活動とは何かを、考えるよい材料になるのではないのでしょうか。

3) 避難所訪問からコミュニティ支援へ、そして学びの場へ

北村良平氏 (Smile with you)

北村氏の所属する Smile with you は、有志が集まって結成した個人の団体で、

- ・ 必要物資の提供
- ・ 被災者の方々への自立支援
- ・ 被災者の方々へのこころのケア
- ・ 被災者の方々の声を届けることや被災地の状況を伝える事
- ・ 被災者の方々や震災で起きたことに対して高い意識を持って考えてもらう事を目的としてスタートしました。



石巻日和山公園から

大川小学校



被災地でのコネクションなどがない状態から、避難所に訪問し、何かできることはないかと探すところから始まりました。その中で少しずつ、現地の方々との交流ができ、活動を行ってきたとのことでした。



東浜地区災害対策本部にて

本部長である豊島さんとの写真。
この豊島さんとの出会いは、Smile with youにとって非常に大きなものとなりました。
豊島さんには、東京での講演会でもお話していただきました。

それらの交流の中で、歯科のニーズがあるところに、健康相談会を開き、また少しでも多くの方が被災地を見たり、被災者の方のお話を聞いてもらいたいとの気持ちから東京にて参加希望者を募り、毎回数人ずつですが、継続して被災地に一緒に行っていたとのことでした。



健康相談会

健康相談会といっても、大半の時間は被災された方々の体験談などを聞かせていただきました。また、皆さん暖かく迎えて下さったことに感謝しきれません。

また、現地だけでなく、東京にしながらできることを模索し続け、被災者の方を東京にお呼びし、講演会をして頂いたり、フリーマーケットに出店し、売り上げを義捐金にするなどの活動も行ってきました。

フリーマーケットの様子

東京でもできる支援活動の一つとして、定期的に行っていました。



氏は、震災から2年が経過し、今後は一人でも多くの人達に

- ・被災地の現状を目で見えて知ってもらう事・肌で感じてもらう事
- ・被災者・被災地の事を忘れ去らないこと

を活動方針として考えていることを述べられ、長期的かつ継続的な支援活動の課題とそれに対する対応策についても案を述べられました。

限られた人たちが、身を犠牲にして支援活動を行うのではなく、多くの人達が少しずつ協力することで大きな力にすることこそが、長期的かつ継続的な支援活動につながることを目的として、今後の活動を構想しているとのことでした。

歯科医師としての前に、一人の人間として被災地に関わる、というスタンスは氏が最も大切にしている姿勢のようでした。

「あなたがむなしく生きた今日は、昨日亡くなった人が生きていと願った明日」講演の最後に示されたこの詩は、少しでも多くの人に見てもらいたいと思います、とのことでした。

4) ディスカッション

3氏の講演後に行ったディスカッションでは、
「今後の活動や被災地との関わり方について参考になった」
などの意見が多くありました。

今回のシンポジウムに参加された方の多くが、歯科をはじめとする医療関係者であることや、これまでに被災地支援活動に携わったことのある方が多かったため、全く被災地支援に関わったことのない方とは、かなり意識の開きがあったことも事実かと思えます。その中で、

「被災地へのバスツアーなどを利用してみては？」

というような意見もあり、震災を風化させたくないという3氏の共通の思いに対する提案も見ることができました。



歯科としての地域への関わり方としては

「被災地支援を行っていくには、医師や歯科医師などの専門職のライセンスを有することが、逆に支援の障害になっている」

との意見が印象的でした。ライセンスを生かしての支援を考えるという事は、地域主体ではなく、押し付けになってしまうので、やはり本来支援活動とは、一人の人としてできることをしたり考えたりすることが大切であり、その結果として専門職としてのスキルを必要とされる場合にスキルを使うべきだという見解は、3氏も共通の認識のようでした。

また、今後の地域への貢献に対して、医師の方の意見が非常に印象的でした。

「癌でターミナルの患者さんに、抗がん剤や鎮痛剤などの薬剤を使うことはありません。しかし、自分の仕事はこれらの薬剤をつかったりすることは、目的ではなく一つのツールにすぎません。自分の本当のやるべきことは、患者さんに寄り添う事です。被災地に関しても同じことがいえると思います。」

この言葉は、非常に重みがあると感じました。

被災地が、地域として復興するために、私たちは寄り添って、地域に貢献できることを押し付けることなく、地域としての自立につながるような活動を行っていかなくてはならないのだと感じます。

直接的な支援でなくても、例えば東北へのバスツアーに参加し、被災地の現状を少しでも知り、現地で消費することも一つの寄り添い方なのかもしれません。

このようなシンポジウム自体も、この先長期的・継続的に行っていくことも、支援活動の一つであることは間違いありません。

今後もこのような考えさせられるシンポジウムが、行われることを切に願います。